

マリ農村の「学校化」

—学年をめぐるやりとりから—

今 中 亮 介*

—イサ、お前の学年はいくつなんだ？
—19年だ。
—へーすごい。あとどのくらい続くの？
—わからないけど、たぶん5年くらいじゃないかな。

わたしは調査中に子どもを相手によく年齢を尋ねる。知らない、と言われることもあるし、知っていても本当より高く言ってくることも多い。結局、本人に聞いただけでは判断できないので、出生届をもっている親に尋ねたりもする。しかし、親も届を無くしていたりして知らないことがある。今度は、誰と誰が同い年で誰が誰より年上でといった、具体的な2者の関係を本人や第三者へ尋ねる。こんな風にいろんなことをしながら「推定年齢」を出していく。でも結局のところ年齢は推定でしかなく、はっきりとはわからないことが多い。

年齢を尋ねるときに学年を尋ねることもある。学年は年齢ほど高めには言ってこないし、あやしいと思えば学校に行って教室を覗いてみればいいのでわかりやすい。学年を尋ねたときにしばしばおこるのが、上のような

やりとりだ。学年を反対に尋ね返されて、わたし（イサ）は19年という彼らからすると非現実的な年数を言う。大体はそれを聞いて驚く。わたしはその反応をみて少し得意になると同時にどこかきまりの悪さも感じる。あとどのくらい学校が続くのかと問われることもあり、そんなときは大体、わからないけど、と前置きをしてからあと5年くらいじゃないかなと適当に答える。

マリ南西部に位置する人口約2,000人の調査村には、5種類の「学校」がある。幼稚園、小学校、中学校、コーラン学校、成人学校である。幼稚園は仏語の「幼稚園 (jardin d'enfants)」から「ジャルダン」と呼ばれるが、あとの学校は現地語で公立の小中学校が「トゥバブーカラン」、コーラン学校が「モリカラン」、成人学校が「バリクーカラン」と呼ばれる。現地語で「学校」は「カランウォロ」という。上記の各学校の語尾にある「カラン」は「カランウォロ」の省略形である。「カラン」は動詞で「読む」を意味し、「ウォロ」は名詞で「場所」を意味する。つまり、学校とはなにかを読む場所である。しかし、なにかを読む場所といっても用いられる言語

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

はそれぞれ異なる。小中学校では白人（トゥバブー）の言語である仏語を読み、コーラン学校ではムスリム（モリ）の言語であるアラビア語を読む。そして、成人学校では成人（バリクー）の言語であるバンバラ語を読む。バンバラ語はマリ南部のリングフランカであり、文法的にも語彙的にも現地語のマリンケ語と非常に近い。出稼ぎや高等教育機関への就学先である首都バマコの言語でもあるので成人の言語といってもあながち間違いではないだろう。

幼稚園はある国際 NGO に促されて 2009 年に開園した。5 つの学校のなかで最も新しい。NGO からは生徒用のイス 22 脚と教師用の教科書が配布されただけで、施設や教員の給料などは提供されていない。専用の施設がないので、授業は村に以前からあった若者小屋（*maison des jeunes*）で開かれている。授業は 3 人の成人女性が無償でおこなっている。彼女たちは免許をもつようなプロの教師ではないが、それぞれ、女性組織の長をやっていたり、村に仏語を操れる女性がほとんどいないなかでしゃべれたり、やり手のおばちゃんたちである。NGO から配布された教科書に沿ってアルファベットや数字の読み書き、歌やダンスなどを教えている。幼稚園は小学校入学の準備段階として位置づけられており、およそ 3~5 歳の子ども 44 人が通っている。1 年間で全カリキュラムを終えるようになっており、多くの者が卒園後すぐに小学校へ入学する。したがって、幼稚園と小中学校はひとつの連続として捉えることができる。当然、この連続の先には村外にある



写真 1 イスをもって幼稚園へ向かう子どもたち

リセや専門学校、大学などの中・高等教育機関がある。

コーラン学校は植民地期以前からある。しかし、基本的に 1 つの学校につき 1 人の教師しかおらず、教師がいなくなると学校もなくなるので、現在村に 4 つあるコーラン学校と植民地期以前のそれとは同一ではない。生徒は村外からの者と村内からの者がおり、前者は教師の家に住み込んで勉学に励んでいる。生徒は無償で住まい、食べ、学ばせてもらう代わりに畑仕事などの労働をおこなっている。4 つの学校の村外からの生徒の数は、25 人、19 人、13 人、10 人である。村内の生徒は来たり来なかったりで、正確な数は把握できないが、各学校につき 5~10 人ぐらいだろう。教育内容はコーランの読み書きである。その他の学校におけるような教師から生徒への一斉教授はみられず、生徒たちはそれぞれの進度に応じて学ぶ。また、教師から直接教えられるよりも古参の兄弟子から教えら

れることの方が多い。当該の箇所を覚えられないまで、とにかく大きな声を出して反復して読み上げるので、コーラン学校の近くを通ると子どもたちの威勢のいい声が聞こえてくる。コーラン学校は幼稚園から大学へと続く連続のなかにはない。しかし、稀ではあるが、卒業後に仏語とアラビア語の両方を学ぶマドラーサへ進学する者もいる。

成人学校も幼稚園と同じNGOの援助によって1985年に開校した。専用の教室があり、黒板とイス、机が設置されてある。生徒には教科書2冊、ノート、小黒板、チョーク、ボールペンがNGOから配布される。教員である40代の女性は村からおよそ7km離れた隣町から来ており、NGOから給料を受け取っている。生徒は既婚女性ばかりで32人いる。授業を覗いてみると小さな子を連れのお母さんも多く、教師も含めて雑談をはさみながら和やかな雰囲気だ。開校当初は男性も通っていたそうだが、今は全くいな

い。そのことについて一期生として通っていた男性に尋ねてみると、最近はお金がないからみな仕事をしていて暇がない、という答えが返ってきた。そうした経済的な理由に加えて、男性に比べて女性の公立学校における就学率が低いことも影響しているのかもしれない。最近では女子就学向上のためのさまざまなキャンペーン¹⁾がNGOなどによっておこなわれているが、以前は女性で公立学校へ行く者はわずかであった。成人学校は読み書き、計算の基礎を学ぶところなので、公立学校でそれらの知識を学んだ者にとっては必ずしも行く必要はない。したがって、成人学校は幼稚園から大学へと続く連続の外にありながらそれらの学校で教育を受けられなかった者の補完的な学習の場ともいえる。

村内の小学校は1974年に、同じく中学校は2003年に開校した。1974年という随分以前から「学校化」が進行していたように思われる。1977年生まれの子の村の男性シャカは、リセを経て、教員養成学校を卒業したの

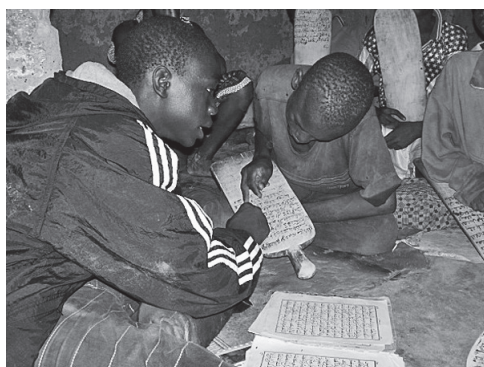


写真2 コーラン学校の様子
兄弟子からの教示。



写真3 成人学校の授業風景

1) 女子生徒だけを対象とした通学カバン、ノート、ボールペン、小黒板、チョークなどの配布や補習授業など。

ち、現在小学校の教師をしている。シャカが小学校を卒業した1993年には6年生はわずか7人しかおらず、卒業試験に合格して中学校へ入学したのはシャカを合わせて4人だけだったという。このころは村の多くの者は公立の学校に興味をもっておらず、子どもはコーラン学校へ通うだけだったそうだ。小学校への入学は通常7歳のときだがシャカは10歳で入学した。10歳のときに父からコーラン学校をやめて公立の学校に行きなさいと言われたからだそうだ。今は亡きシャカの父が当時何を考えてそう言ったのかは知る由もないが、現在シャカが立派な教師として活躍しているのをみると先見の明があったのかもしれない。1993年に7人しかいなかった小学6年生の人数は、2007年には130人（うち女性52人）になっている。年によって生徒数はばらつきがあるものの、現在では村のかなりの数の子どもが小中学校へ通っている。このことから1974年に小学校は開校していたものの、「学校化」が本格的に進行したのはせいぜいここ数十年のことであることがわかる。

子どもに学年を尋ね返され、「19年だ」と答えたら驚かれたということを冒頭で述べた。そのときに感じたきまりの悪さとはなんだったのだろうか。わたしたちの社会では学年は他者とのやりとりにおいて確かな土台を与えてくれる。学年を聞いて、とたんに敬語をやめて打ち解けるようなことがある。学部生のころには大学院生と聞いて身構えてしまったこともある。でも、それはこっちに来

たら通じないものだと思っていた。フィールドで子どもたちとなにかをしているとき、たとえば、コーランを学んでいるとき、共同労働をしているとき、サッカーをしているとき、わたしは笑われてばかりだ。どう考えても「1年生」か「2年生」でしかない。それでもたまには褒められることだってある。そんなときはとてもうれしいし、きまりの悪さなんて全然感じない。そういうものだと思っていたからこそ、学年だけを聞かれて、なにもしていないのに褒められたような驚きを見せられたときには素直に喜べなかった。きまりの悪さは、こんなに遠いところにいるのに、なんで学年はわたしたちのものと同じように比べられ、扱われているのだろう、という違和感からきていたのではないかと思う。

幼稚園から大学へと続いていく「白人の学校」の「学校化」は、近年抗しがたい勢いで進行している。しかし、それらの学校とは全く異なる尺度で動いている「ムスリムの学校」の重要性は全く揺らいでいないようにみえるし、公立の学校に行かなかった者がおしゃべりを楽しみながら最低限の知識を学ぶ「成人の学校」も機能している。白人の学校に行くことは決して悪いことだとは思わないが、それらの学校に行かないことが悪いことだとも思わない。マリ農村の「学校化」は「白人の学校」だけの画一的なものではなく、別の学校へ行くことも、とりあえず学校に行かないことも許されるような複数的でゆるやかなものであってほしいと思う。